

場所理論と関係文法の統合へむけて

村 上 丘

Toward an Integration of Localist Theory and Relational Grammar

Takashi Murakami

0. 序

1. 句構造文法の問題点
2. 多元的文法の問題点
3. 場所理論的關係文法
4. 流体の運動をあらわす動詞の分析
5. 様相の変化をあらわす動詞の分析

0. 序

場所理論 (localist theory) とは、19世紀の前半にドイツで主張された理論で、場所表現から他のタイプの表現形式が派生されるものと想定する。すなわち、場所表現を他の表現形式にくらべ文法的・意味的により基本的とみなす。一方、関係文法 (relational grammar) は、構造主義もしくは変形文法に対するアンチテーゼとして、1970年代にアメリカで提唱された。そこにおいては、文法関係を言語記述における原始的要素とみなし、個別言語および複数言語間における一般性を把握しようとする。本稿の目的は、これら2つの言語理論の統合をはかることにある。その一例として、流体の移動や様相の変化など、連続体 (continuum) の運動をあらわす動詞をとりあげる。連続体の運動は〈状態の変化〉としてとらえることができる。〈場所の変化〉をあらわす構文に関する分析が、どの程度、〈状態の変化〉をあらわす構文の分析に適用できるかを考察する。

1. 句構造文法の問題点

句構造文法は、言語要素の連鎖を生成するだけでなく、連鎖の構成素分析に関する情報を提供する。句構造文法の規則によって規定された句構造構式は、①ある文にふくまれる形式素が、どのような左右関係にあるか、すなわち、言語要素がどのように線的に配列されるか、を決定し、②どの形式素連鎖がどのような種類の構成素をなすか、すなわち、当該の文がどのような階層的内部構造をもつか、を指定する。

句構造標式は、当該言語における構成素の構造を明示的に表示するのにきわめて有効であるとみなされ、これまで、それらの基底構造・派生構造・表層構造などを表示する際、頻繁に使用されてきた。ところで、句構造文法には、直観的に関連があるとみなしうるふたつ以上の文を関係づけられないという欠陥が内在するため、変形規則の必要性がとえられた。しかし、現実には、直観的に関連性があるとみなしうるが、変形規則では関係づけられない (もしくは、関係づけると変形の概念をできるだけせまく定義するのに支障をきたすとかんがえられる) 言語現象がある。本節では、

その点に焦点をしぼり、句構造文法の問題点をさぐる。

たとえば、A and B という等位構造と、B and A という等位構造は、知的に同義であるにもかかわらず、まったく別個の句構造標式が付与される。(これらふたつの構造を、かりに変形規則で関係づけようとしても、いずれかを恣意的に基底構造として設定しなければならず、妥当性にかける。)このようなふたつの等位構造が、決して同一の構造に帰せられることがないのは、句構造標式が、等位関係にある2項の指定と、それらの先行関係の指定とを、同時におこなう機能をもつからである。

句構造標式の問題点は、さらに、たとえばラテン語のような語順の自由な言語が例証する。このような言語においては、形式素 P, Q, R の3つは、同一の知的意味をたもちつつ、6とおりの配列をゆるす。このような場合、それぞれの構造に対し、まったく別個の句構造が付与される。(もし、それらをかきまぜ規則で関係づけるにせよ、6つのうちのいずれかを恣意的に基底構造として選択するという難点を回避できない。また、語順はかえるが文法関係はかえないというかきまぜ規則が、変形規則なのかどうかも問題がある。)このような語順の自由な言語における句構造標式の問題点がどこにあるかという点、さきほどの等位構造の場合と同様、展開規則がふたつの異質な作業をひとつに収斂しておこなっているせいであるとおもわれる。その作業とは、ひとつに、当該の文(構成素)がどのような形式素(P, Q, R)からなりたつかを規定することであり、もうひとつは、それらの形式素がどのような順序で配列されるか(すなわち、PQR, PRQ, QPR, QRP, RPQ, RQPのいずれが選択されるか)を指定することである。

句構造標式がふたつの情報——支配関係と先行関係——を含有することはすでに確認したが、それらは分離不可能な概念ではない。むしろ、それらを分割し、それぞれを言語理論の適切な位置に設定した方が、一般的な言語記述が可能になるとおもわれる。すなわち、先行関係は個別言語固有の規則で決定されるものとみなす。一方、支配関係(これはこの段階では構成関係といいかえた方がよいかもしいないが)は、一般言語理論のなかで定義されるべき概念とみなすのである。このようにかんがえると、2つの等位構造 A and B と B and A の構成関係は同一物(A, B, and)に帰着し、また6とおりの語順をゆるす文の構成関係も P, Q, R に帰着する。このように、語順に左右されない形式素同士の構成関係を明白にすることによって、語順のことなる言語間にみられる内在的共通点および相違点がつまびらかにされ、普遍文法の内実がゆたかになるものとおもわれる。Lehmann (1978, 43) が「普遍文法において言語要素は無順序である」といったのも、この点をさしているものとおもわれる。(もちろん、ここでは、言語の構造を規定するのに構成関係だけで十分だ、と主張しているわけではない。この点に関しては第3節でふれる。)

2. 多元的文法の問題点

文副詞や挿入節などのように、文中のさまざまな個所にあらわれうる構成素と、それをふくむ文との関係についてみてみよう。たとえば(1)の4つの文は、別々の句構造規則で導入するか、もしくは、(1a)に格下げ変形を適用して他の文を派生するか、がかんがえられる。

- (1) a. I think John is honest.
 b. John, I think, is honest.
 c. John is, I think, honest.
 d. John is honest, I think.

しかし、前者の解決案では、知的に同義であることを説明するため、それなりの機能をもつ解釈規則を導入しなければならず、くわえて、句構造規則がきわめて複雑になることが余儀なくされる。一方、後者の解決案では、もともと構成素を形成していない2つの形式素 I think をひとつの構

成素にするため、再構成規則を導入するなど、いわば、文法をつじつまをあわせる方策が必要となる。いずれにせよ、これらの解決案とそれにもなる問題は、前節で検討した句構造文法のさらにもうひとつの欠陥を露呈しているものとおもわれる。

最近、2次元の世界に展開される句構造文法の不備の認識から、多元的な文法理論が提唱された。この理論の立場は、「従来は同一次元の構造に押し込めて扱っていたもののうち、別の次元に属すると考えるべきものは別のものとして分離して扱う」ことにある(原口, 1982: 169)。たとえば、前述(1)の文においては、挿入節 *I think* と核心部 *John is honest* とは、別の次元において独自に句構造規則で導入し、対応線によって、次元の異なるものをむすびつけ、語順の問題等を解決しようとする。

多元的文法理論においては、(たとえばコメント表現と核心文とのように)構成素A、B間の線的配列の柔軟性を、それらの属する次元の相違によって説明できるという利点がある。これは、従来の句構造文法ではなしえなかったことである。しかし、多元的文法は、構成素A、B間の線的配列の柔軟性を説明できても、形式素 α 、 β 間の線的配列の柔軟性を説明することができない。なぜなら、ひとつの構成素に支配される複数の形式素 α 、 β ……は、以前として、2次元世界の範囲内で、句構造規則により生成されるからである。したがって、この点では、第1節で検討した句構造文法の問題点——すなわち、言語要素の線的配列に関する問題点——を、いまだ超克していない。すなわち、等位関係にあるAとBの2項、6とおりの可能な具現形をゆるす3つの形式素P、Q、Rは、あいかわらず、句構造規則でしか導入できないのである。

さて、*I think* のような挿入節の出没の位置に関する柔軟性を説明するには、どのみち、複数の次元を設定しなくてはならないだろうか。もし、ここで、構成素同士のみならず、形式素同士も無順序であると仮定するなら、その必然性はなくなるとおもわれる。そのとき、(1)の各文は、*I think* というコメント表現が構成素をなすという情報と、それが線状化されるとき位置を指定する情報があたえられれば、すべて生成することができる。(もちろん、ここでは、コメント表現(モダリティ)と中核文(命題)との区分が不必要だと主張しているわけではない。)結局、多元的文法理論は、名称は多元的とはいうものの、以前として句構造規則を内包する以上、複2元的文法とみることができる。そして、いくら次元の数をふやそうとも、ひとつの次元はあくまで句構造規則に順守した2次元文法であり、これまで指摘したいくつかの句構造標式の問題をそのまま内包するとおもわれる。

3. 場所理論の関係文法

第1節末尾において、普遍文法では言語要素同士が無順序であることに言及したが、それらの言語要素に、名詞句や動詞だけの範疇に関する情報さえあたえておけば十分であるわけではない。もし、基底構造に範疇だけの情報しかあたえなければ、たとえば、*John hit Mary.* などという文の語順は決定できない。なぜなら、*John* と *Mary* とはともに名詞句であり、それらになら意味的あるいは統語的情報をも考慮にいれなければ、それらの動詞に対する相対的位置はきまらないからである。意味的情報(格)を基底構造にくみこむと想定する言語理論(たとえば格文法)も可能であるが、そこに文法関係に関する情報があたえられていると仮定することも可能である。そのような仮定にもとづいて構築した文法理論のひとつに関係文法がある。また、場所表現から、他の種の言語表現が派生的に生ずるとみなす言語分析の方法論があるが、この場所理論と関係文法とを融合させて言語現象の記述をこころみたものに Murakami (1986) がある。そこでは、複数の文法関係がひとつの名詞句に同時に付与される多重結合現象の必要性を主張し、それが、所有・存在・経験などをあらわすさまざまな *have* 構文に関与するとかんがえるべき根拠をしめした。3節で

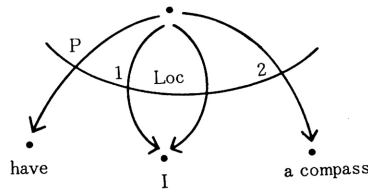
はふたたび Have 構文をとりあげ、前掲論文でいいのこした点についてふれる。つぎに、関係文法と場所理論が、他のさまざまな言語現象に対してあたえることのできる記述・説明をみる一例として、連続体 (continuum) の運動をあらわす動詞をふくむ構文をとりあげる。連続体の運動とは、液体・気体のような流体の移動や、生命体の伸長をさす。4節では前者を、5節では後者をあつかう。

3.1

所有は存在の派生形であり、(2) に対応する関係網は (3) として表示される。

(2) I have a compass.

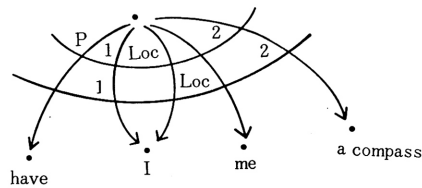
(3)



(3) の関係網は、主語と場所格の多重結合を含有している。この結合が解除されると、主語と同一指示的名詞句をふくむ前置詞句があらわれる。そのような前置詞句をふくむ構文 (4) に対応する関係網は (5) として表示される。

(4) I have a compass on/with me.

(5)



Gruber (1976 : 65) は、(6 a) は非文法的だが (6 b) の基底構造を反映しているとのべた。

(6) a. *The book is to Bill.

b. Bill has the book.

彼の言説は、(6 b) に対応する関係網において、主語である Bill は、Loc の文法関係をもなることを示唆したものと解釈される。

Gruder (1976 : 59) は、さらに、つぎのような対話が可能であることを指摘する。

(7) Where is the book?

John has it.

この事実も、have 構文の主語 John が、場所格をも有しているからこそゆるされるとみなすことができる。

3.2

大塚 (1986年8月4日付の私信) は、上記の議論に対し、「多重結合に関与している Loc が最

最終的に (with, on, to などのような) いろいろな前置詞をともなってあらわれるという事実の説明はかなりむずかしい」という疑念を表明している。この節では、それらの前置詞の具現が予測可能である旨の主張をする。

have 構文にともなう前置詞句のなかの前置詞は、つぎのようなものがある。

- (8) a. I have no money with me.
 b. I had nothing about me but a knife.
 c. She has no ring on her finger.
 d. The house has a roof to it.

まず (8 c) から明白なのは、on が「接触」の意味をもつことである。すなわち、体に密着してもっていることを含意する。一方、(8 b) のような about は around の意味にちかく、「近辺」すなわち「身のまわりに、身近ちかく」の意味をもつ (石橋, 1966 : 496)。通例、前置詞 to は「方向」をあらわす。しかし、(8 d) のように、have のような状態動詞と共起したとき、to は「近接」の意味をあらわす。それは、Chapman (1975 : 68) がかけたつぎのような構文においてもみることができよう。

- (9) a. This is the key to the lock.
 b. This is the handle to the broom.
 c. This is the gate to the castle.

二様の前置詞句をつけることで have 構文のもつ両義性が解消されるという事実も、前置詞句が固有の意味をもち、その具現が文法的に規定されるという議論を支持するものとおもわれる。たとえば、(10) は両義的であるが、その2つの解釈を (11) のように非両義的にしめすことができる。

- (10) The house has a roof.
 (11) a. The house has a roof on it.
 b. The house has a roof to it.

(8 a) における with は「所有」をあらわす。その場合、with は特定の位置関係を指定しない一般的あるいは中立的な位置概念をあらわす。on が with より特定のであるという事実は、たとえばつぎのような対からうかがうことができる。

- (12) Does Mary have a wallet on her?
 No, but she does have one with her.
 (13) *Does Mary have a wallet with her?
 No, but she does have one on her.
 (Gruber, 1976 : 58—59)

このような各種の前置詞句と共起する動詞に「携帯」の意味をもつ carry がある。

- (14) a. John carried the money with her.
 b. He never carries much cash on him.
 c. He always carries some money about her.

上記の例文は、(8) でみた「近接」「接触」「近辺」の用法と平行するものとおもわれる。また with が中立的・一般的位置関係をあらわすことは、抽象的概念の所有をあらわすのにつかわれることを予測させるが、それはつぎの例によってしめされる。

- (15) He bore with him all his life the memory of her painful death.

これと平行する現象として、つぎのような構文をあげることができよう。

- (16) a. He patted her shoulder.
 b. He caught her hand.
 c. He shot her head.
- (17) a. He patted her on the shoulder.
 b. He caught her by the hand.
 c. He shot her in the head.

中右(1984:79)は、動詞の意味論的性質(表面接触・把捉・侵入)と整合的な前置詞(on, by, in)が選択されることを指摘している。これらの前置詞の具現は、動詞の意味情報にもとづき、ほぼ予測することができるが、(17')のように、on, by, in 以外の前置詞がでてくること、(17'')のように、表面接触の意味をあらわす動詞と前置詞 in が共起しうることを考慮すると、当該の動詞が唯一的にひとつの前置詞しか選択しないような文法は制限がきつすぎ、さまざまな前置詞を選択できるメカニズムが必要となる。(この点に関しては、4.3節でふたたびふれる。)

(17') He struck her across the face.

(17'') The brick hit John in the face.

have 構文においても、接触動詞構文においても、前置詞の具現に関する情報を統語構造のなかにも明記しておかなければ、その出沒を予測することができない。したがって、Loc だけでは不十分なのはあきらかである。「近接」「近辺」「接触」などの意味情報にもとづいて、Loc の文法関係を細分化して表示しなければならない。この節では、(8)にみられる前置詞の具現は、動詞から唯一的に予測するのではなく、当該の事態を下位区分することによって予測しうることを確認した。以下の議論においては、上記の考察をふまえながら、Loc でもって場所格をあらわす文法関係を代表させることにする。

3.3

「包含」「収容」を意味的にあらわす include, involve, hold, contain などの状態動詞についてみよう。

- (18) a. The list includes my name.
 b. The bucket contains water.

ともども、表層主語は場所をあらわしているため、表層主語は、対応する関係網のいずれかの層において場所格の文法関係をになうものと仮定しよう。そのとき、(18)の構文に対応する関係網の候補として、すくなくとも、① Locが1に昇格した規則が関与するもの、② Loc と1との多重結合が関与するもの、の2つがかんがえられるが、②を支持する統語的根拠がある。多重結合が関与する関係網を想定したとき、それが解消されれば余剰的代名詞があらわれることが予測される。実際、(18)に対応するつぎのような文が許容される。

- (19) a. The list includes my name in it.
 b. The bucket contains water in it.

したがって、have と同様に、include や contain をふくむ構文も、始発層で1とLocの多重結合を有する関係網に対応するものとかんがえられる。

ところで、興味ぶかいことに、これらの構文は、通例、受身にすることができない。

- (20) a. The apples are contained in that box.

- b. *The apples are contained by that box.
 (21) a. Chemistry is involved in our study.
 b. *Chemistry is involved by our study.

これらの構文が受身にできないのは、始発層であたえられた Loc のせいとおもわれる。もし、最終層における前置詞付与規則に関し、Loc が主語の失業者に優先するとかんがえると、上記の事実の説明がつく。すなわち、(20, 21) の構文が by ではなく in でマークされる理由を、対応する関係網における多重結合の存在にもとめることができ、上記のような文も、have 構文と同様、多重結合を英文法に設定することを支持するものとおもわれる。

4. 流体の運動をあらわす動詞の分析

不連続 (discrete) な固体の運動と、液体や気体の運動はどのようにことなっているだろうか。運動とは場所の変化としてとらえることができるが、その際、変化するものが固体の場合、場所が変化すると移動前の場所にその物体はない。一方、液体や気体のような連続的な物体の場合、変化するもの自体のある部分は、場所の変化をとまなう。しかし、その部分は他の部分から独立していないために、移動前の場所にその物体がもはやない、とはいえず、その運動を具体的に認知しにくい (cf. 池上, 1981: 283)。物理的に不連続である流体の運動を、本質的に不連続である言語要素の連鎖としてあらわすとき、言語はどのような方策をとっているのだろうか。

4.1

川のながれをあらわす動詞をふくむつぎのような構文についてみよう。

- (22) a. The Shinano pours (itself) into the Japan Sea.
 b. The Sumida discharges (itself) into Tokyo Bay.
 c. The Thames empties (itself) into the North Sea.

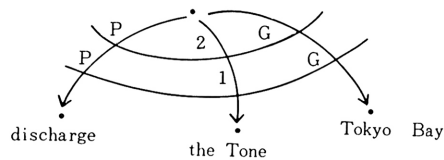
上記のような再帰形の随意的出没現象を説明しなければならない。液体は〈非人間〉であり、到着点にむかって重力にしたがい下降・落下するだけなので能動性がない。したがって、流体の運動をあらわす動詞は、始発で非対格構造をとり、表層主語は始発直接目的語の文法関係にならうとおもわれる。では、なぜ (22) のような構文に再帰形があらわれるのだろうか。そもそも、運動をあらわす動詞をふくむ構文における再帰形とは、①自らの行為を自らにほどこすとみなしうる事態が生起し、②作用をおよぼす時刻とその作用が達成されるまでの時刻とのあいだに時間的へだたりがある——たとえば (23)——場合につかうことができるとおもわれる。

- (23) a. John shaved himself.
 b. John killed himself.

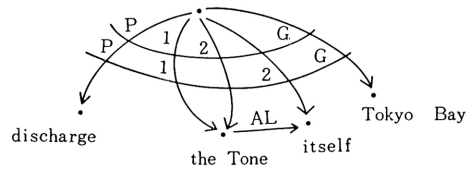
流体においては、その物体の一部に運動が開始しても、それが他の部分に作用して運動が伝達されるのに時間がかかる。したがって、一定時間における流体の各部分の位置の移動距離がことなる。落下という自然現象を、落下物 (下降物) である「川」の観点にたつて記述するとき、上述の再帰形成立条件の①がみたされるとかんがえることができる。一方、固体ではなく連続体の移動という観点で「川」の運動を記述するとき、上述の条件②がみたされるとかんがえることができる。

たとえば、(22b) のうち、再帰形をもたない構造は (24a) に、再帰形をもつ構造は (24b) に対応するものとおもわれる。

(24) a.



b.



(24a) は非対格構造であり、流体の運動をいわば〈状態〉としてのべている。一方(24b) は対格構造であり、流体の運動を能動的あるいは使役的にのべている。流体の運動とは、〈状態〉としても〈できごと〉としても陳述することができ、それが言語として構造化される際、始発層の非対格、対格構造として二極化されるものとおもわれる。ある物理現象が二様の言語現象として具現する場合、それは、その物理現象が各々の言語現象で典型的にあらわされる物理現象の中間領域をあらわしているとかんがえることができるかもしれない。

4.2

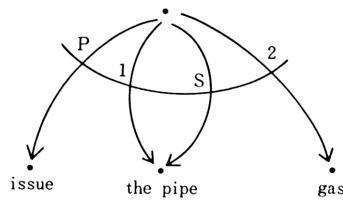
(24a) と(24b) を比較してみると、前者は場所格(起点・着点も場所格の下位概念である)を含有した始発非対格構造、後者は場所格および多重結合をふくんだ始発対格構造である。この対応は、実は、川のながれをあらわす動詞をふくむ構文だけでなく、他の流体の運動をあらわす二様の構文にもみうけられる。

- (25) a. The pipe issues gas.
 b. Gas issues from the pipe.
- (26) a. The volcano ran molten lava.
 b. Molten lava ran from the volcano.
- (27) a. The roof leaks rain.
 b. Rain leaks from the roof.
- (28) a. The wound oozes blood.
 b. Blood oozes from the wound.
- (29) a. Pine trees exude resin.
 b. Resin exudes from pine trees.
- (30) a. The fountain spouted water.
 b. Water spouted from the fountain.
- (31) a. His hands was dripping blood.
 b. Blood was dripping from his hands.

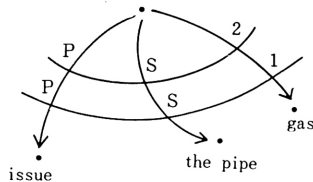
(25b) では、the pipe が起点(源泉格)、gas が最終主語、(25a) では、gas が直接目的語、pipe が最終主語の文法関係をになっているとみなすことができる。換言すれば、pipe は表層主語もしくは起点の文法関係をになうことができ、gas は直接目的語もしくは主語の文法関係をになうことができる。これらの条件をみだし、なおかつ、2つの文の知的同義性をたもつような構造とし

て、つぎのような関係網を提案する。

(32) a.



b.



(32 a) と (32 b) は、ともども、ほとんどひとしい始発構造をもっている。前者は、気体の運動を<できごと>としてとらえたもので、主語化された起点が、能動者あるいは使役者の役目をはたしている。一方、後者は、気体の運動を<状態>としてとらえている。gas は最終主語の法則にのっとり主語化されているが、動作主の機能ははたしていない。

起点と着点は、運動のはじまりとおわりの場所を指定するという共通性を持ち、場所格の下位概念である。ここまでの考察において、主語と直接目的語と場所格のうち、いずれか2つが多重結合した構文をみてきた。すなわち、3節の have 構文と4.2節の issue 型動詞構文に対しては、主語と場所格が多重結合した関係網を設定した。4.1節における discharge 型動詞構文に対応する関係網では、主語と直接目的語が多重結合しているものと想定した。理論的には、のこりのくみあわせ、すなわち、直接目的語と場所格の多重結合を含有する構造がかんがえられる。その例を次節で考察する。

4.3

動詞 bleed と名詞 blood との関連をしめす、つぎのようなパラレーズ関係にある構文をみてみよう。

- (33) a. Blood is running from his nose.
 b. His nose is bleeding.
 c. He is bleeding from / at the nose.

動詞 bleed は、emit blood と POD とであらわされているとおり、「血」と「ながれる」という2つの意味成分に分解することができる。したがって、動詞 bleed をもちいた (33 b), (33 c) は融会的・総体的表現であるのに対し、名詞 blood と動詞 run をもちいた (33 a) は、分析的・迂言的表現であるといえる。(33 a) に対応する関係網の始発層は、直接目的語と起点とからなる非対格構造をなすとかんがえられる。その情報をいかしながら、(33 b), (33 c) の関係網を規定するには、どうすればよいだろうか。まず確認すべきことは、(33 a) と (33 b, c) は意味的関連があるが統語的関連はなく、(33 b) と (33 c) は意味的・統語的関連があるということである。なぜなら、(33 a) は也り2文とことなる述語を使用し、(33 b) と (33 c) は同一の述語を使用

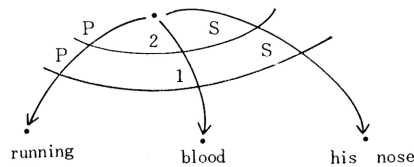
しているからである。(33b)と(33c)の対で考慮しなくてはならないのは、前者において his nose と1つの構成素を形成していたものが、後者では he と the nose との2つの言語要素に分離してあらわれる点である。

Murakami (1983) では、(33b, c) に類似したつぎのような構文の関連をしめすのに、所有者上昇規則の関与を想定した。

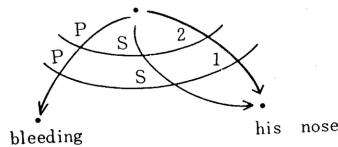
- (34) a. His left leg is lame.
b. He is lame in the left leg.

しかし、このかんがえには問題がある。なぜなら、上昇規則をうけた出身者の名詞句は失業者となってしまう、場所に関する情報を有さない。したがって、そこに適正な場所格をあらわす前置詞を付与することができない。そこで、ここでは、所有者上昇規則をもちいる案を徹廃し、代案として、多重結合を含有した関係網を設定する。すなわち(33a, b, c)には(35a, b, c)が対応すると想定する。

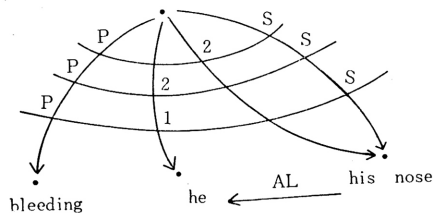
- (35) a.



- b.



- c.



このかんがえの利点は、場所格に関する情報が、前置詞付与規則の適用時までうしなわれないため、適切な前置詞を付与することが保証されることにある。さらに、(35b) (35c) の始発層の構造は、より分析的な構造(35a)の始発層と同一であるため、それらの知的意味の同義性を説明できる。

一般的にいて、具象物の運動とは、起点・着点・対象物(運動する物体)の3項から成立する。しかし、この節では、流体の運動をあらわす動詞をふくむ構文を、起点もしくは着点をあらわす項と対象物をあらわす項の2項からなりたつものとみなした。これは、流体という、形態のさだまらない物体の位置は、起点もしくは着点のいずれかにおいて特定化されやすいという流体の本質によるものとおもわれる。すなわち、川のながれというのは、さまざまな支流が合流し、大河となつてそそぎこむ地点(湾や海)を特定化することはたやすいが、その水源はさまざまな地点でありうるため、特定化しにくい。煙という気体も、その発生源である火種のある場所を特定するのは容易だが、大気に拡散していくその煙の行き先を特定化することは困難である。出血という現象において

も、人間の関心は傷口にむけられ、血のながれるゆくえにむけられることによりまされだろう。つまり、流体の運動をあらわす動詞をふくむ構文とは、対象物と起点、もしくは、対象物と着点さえ明白ならば、完結する。

起点と着点という概念は、変化のはじめとおわりという意味で、論理的には完全に対等のものである(池上, 1981: 126)。しかし、流体の運動をあらわす動詞をふくむ構文において、起点と着点とは対等のあつかいをうけていない。すなわち、流体は拡散・離散しやすく、起点の方が着点より特定化しやすい。核的文法項(主語または直接目的語)と着点との多重結合が言語構造のなかにあられず、核的文法項と起点との多重結合があらわれたのは、このためであるとおもわれる。この点において、言語構造における起点と着点との非対称性が現出する。すなわち、X runs into Y と同義で *Y runs X とはいえないが、X runs from Y と同義で Y runs X といえるのである。

この節では、資料を流体の運動をあらわす動詞に限定した。ところで、これらとまったく平行するふるまいをする、より抽象的な意味をもつ動詞がある。たとえば、derive は、This word derives (itself) from Hebrew. のように、discharge とおなじ文型をとる。また、かつて心理主語移動変形で関係づけられた Your advice benefited me. と I benefited from your advice. は、issue 型動詞の呈する対と平行する。これら、「派生する」「利益をこうむる」という現象は、流体の運動とおなじく、状態の変化ととらえることができる。したがって、derive, benefit などの動詞にも、流体の運動をあらわす動詞とおなじ分析があてはまるとおもわれる。

5. 様相の変化をあらわす動詞の分析

前節では、流体の運動をあらわす動詞について考察した。流体とは、分割できない連続体であるが、連続体のすべてが流体ではない。すなわち、他にも連続体としての相をみせるものがある。その例が様相の変化である。この節では、さまざまな様相の変化をあらわす動詞をふくむ構文をあつかう。

5.1

change, grow, transform, develop などの動詞は、ある状態を別の状態にかえることを意味する。これらの動詞によって、程度・外観・質・量など、さまざまな変化の過程をあらわすことができる。Langendoen (1970: 71) は、これらの動詞を状態変化動詞 (change-of-state verb) とよび、Leech (1971: 19) は、過程動詞 (process verb) とよんだ。流体が空間的にある場所から他の場所へ移動することと、ある様相が他の様相へ、漸次、推移することは、運動前と運動後のあいだに、無数の中間段階が介在しうる点において、共通性をもつ。

しかし、流体の運動と様相の変化とのあいだには、つぎのような相違もある。第1に、流体の運動の場合、運動前の形態と運動後の形態を明確に区別することはむずかしく、言語表現としてもその点には頓着しない。つまり、前述したように、運動前もしくは運動後のいずれかの場所が特定化さえされればよい。一方、様相の変化の場合、運動——この場合、抽象的な意味だが——前と運動後の状態の差が明白である場合、当該の構文がつかわれる。第2に、X leaks from Y という場合、YはXのもれでる場所をしめし、XとYとは同一物ではありえない。一方、X grows from Y という場合、XとYとの同一性が維持されているとみなすことができる。この同一性という概念は、Gruber (1976: 140) が同一性パラメーター (Identificational Parameter) とよんだものに対応する。たとえば、(36)において、turn into のあとにくる名詞句は、be のあとにくる名詞句に対応する。

(36) a. The house turned into a shack overnight.

b. The house is a shack.

以下の議論においては、この同一性という概念が、様相の変化をあらわす動詞をふくむ構文の構造を規定するうえで、重要なはたらきをすることをみる。

5.2

具象物の運動とは、起点・着点・対象物の3項から成立する。実際(37)においては、それらを明示する要素があきらかである。

(37) a. The aeroplane flew from London to Paris. (Lyons, 1968 : 365)

b. The message traveled from Bill to Alice. (Gruber, 1976 : 78)

一方、様相の変化は、前述したように、起点と着点の状態の差異が明瞭であってこそ認識の対象となりうる。それらは、3項とも構文のなかにあられ、構造上(37)と平行する。

(38) a. She changed from a witch into a princess.

b. He converted from a Protestant to a Catholic. (Gruber, 1976 : 143)

(to は表面的変化, into は本質的变化をあらわすのに使用される。)しかしながら、具象物の運動と様相の変化にはおおきなちがいがあある。それは、前述した同一性に関してである。すなわち、具象物の移動をあらわす(37a)において、aeroplane, London, Paris は別個の事物であり、同一ではありえない。一方、様相の変化をあらわす(38a)において、she, witch, princess の同一性は保持されているとかんがえることができる。

ところで、様相の変化をあらわす動詞は、(38)のような構文のみにあられるわけではなく、(39)のような構文にもあられる。

(39) a. The witch changed into a princess.

b. The protestant converted to a Catholic.

ここでは、場所理論にのっとり、(39)も(37)とひとしく、起点・着点・対象物の3項から成立すると仮定しよう。(39a)の場合、起点の状態(witch)と着点の状態(princess)の2項は明白である。では、対象物をあらわす項は何なのだろうか。ここでは、この文のトピックであるwitchがその役目をはたしているとかんがえる。すなわち、witchが起点と対象物の2項の機能を兼務しているとみなす。

まとめると、つぎのようになる。動詞change, convertは、対象物・起点・着点の3項を要求し、それらが実際に3つの形式をとって(38)のように具現化する。しかし、(39)のように、3項のうち2項(対象物と起点との融合形および着点)が具現化することもある。この具現形が可能なのは、すなわち、2つの機能を有する1つの言語形式がゆるされるのは、対象物・着点・起点が同一性を保持しているという、意味的なうらづけがあるからだであるとおもわれる。

同様のことは、運動をひきおこすもうひとつの項が関与する構文においてもあてはまる。つぎの文を比較してみよう。

(40) a. The pilot flew the aeroplane from London to Paris. (Lyons, 1968 : 365)

b. He transported the message from Bill to Alice.

(41) The experience has transformed him from a lazy fellow into a capable man.

(40) と (41) は、ともに、誘発者・対象物・起点・着点の 4 項を含有する。しかし、前者では、対象物・起点・着点のあいだに同一性がないのに対し、後者では、それらにおける同一性がある。

対象物・起点・着点のあいだに同一性がたもたれている場合、対象物と起点は 1 つの言語要素としてあらわれうる。

(42) The experience transformed the lazy fellow into a capable man.

5.3

具象物が運動する場合、対象物・起点・着点の 3 項が必要であり、その運動を記述する際、それらの 3 項は 3 つの言語要素として顕現しうる (X moves from Y to Z.)。一方、様相の変化を記述する場合、具象物の運動とおなじく、対象物・起点・着点の 3 項が、3 つの言語要素としてあらわれうる (X changes from Y (in)to Z.)。ところで、すでに、つぎのような仮説をたてた。

(43) 様相の変化をあらわす動詞は、つねに、対象物・起点・着点の 3 項をしたがえる。

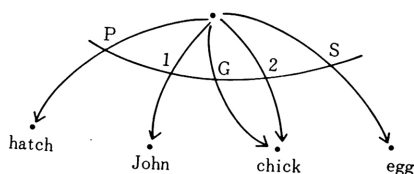
様相の変化をあらわす動詞をふくむ構文には、対象物と起点、もしくは、対象物と着点の 2 つの言語要素から成立する変異形がある (X changes from Y; X changes (in)to Y.)。仮説 (43) をふまえ、これら、項に対して言語要素の数が 1 つすくない構文は、2 つの機能をはたす言語要素を (すくなくとも) 1 つふくむと想定する。そのような言語要素は、関係文法の枠組みでは、多重結合名詞句に相応するとかんがえられる。

様相の変化をあらわす動詞の例として develop, hatch をとりあげ、これまでの考察をまとめてみよう。

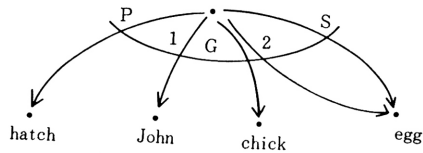
- (44) a. John developed an oak from the acorn.
 b. John developed the acorn into an oak.
 c. An oak developed from the acorn.
 d. The acorn developed into an oak.
- (45) a. John hatched a little chick from the egg.
 b. John hatched the egg into a little chick.
 c. A little chick hatched from the egg.
 d. The egg hatched into a little chick.

奥津 (1980 : 98) は、動詞 hatch について、「hatch は「卵」と「ヒナ」という 2 項があり、前者が原因または起点として結果または目標である後者に変化するという意味構造をもつ」とのべる。ところで、この場合の変化とは自己制御不可能な状態の変化を意味する。したがって (42 c), (42 d) における表層主語 a little chick, the egg は、ともども、行為者ではない。それらは、始発層において直接目的語の文法関係をになうものと想定される。(42) に対応する関係網は、つぎのようにかんがえられる。

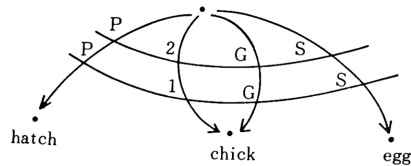
(46) a.



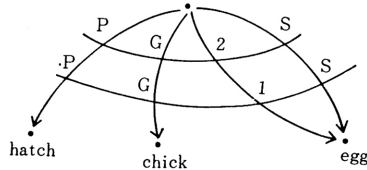
b.



c.



d.



動詞 develop, hatch は、様相の変化をあらわすので、仮説 (43) にしたがって、対象物・着点・起点の3つの項を要求すると想定する。それらの項は、対応する関係網において、2・G・Sの文法関係をになる。直接目的語の文法関係をになった名詞句は、起点もしくは着点の文法関係をもになり多重結合現象を呈し、関係網に表示される。

参考文献

原口庄輔 (1982) 「多元的文法理論」, 『言語文化論集』第13号, 167—194, 筑波大学現代語・現代文化学系紀要。

石橋幸太郎他 (1966) 『英語語法大事典』. 大修館。

中右 実 (1984) 「英文法ワンポイントレッスン He knifed her in the throat」, 『月刊言語』Vol.13 No.7. 78—79.

池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論』, 大修館。

奥津敬一郎 (1980) 「動詞文型の比較」, 国広哲也編『日英語比較講座, 第2巻文法』, 63—100. 大修館。

Chapman, Robert L. (1975) "Semantics and syntax of the to possessive in English," *Journal of Linguistics*, 11. 63—68.

Gruber, Jeffery S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. North-Holland Publishing Company.

Langendoen, D. Terence. (1970) *Essentials of English Grammar*. Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*. Longman.

Lehmann, Winfred P. (1978) *Syntactic Typology: Studies in the Phenomenology of Language*. University of Texas Press.

Lyons, John. (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.

Murakami, Takashi (1983) "The Unaccusative Hypothesis and Possessor Ascension," *Descriptive and Applied Linguistics*. Vol. XVI. 131—139.

Murakami, Takashi (1986) "Multiattachment in Have Constructions : Interplay of Relational Grammar and Localism," *Descriptive and Applied Linguistics*. Vol.XIX. 163-174.